

〔研究会報告〕

『怪異と遊ぶ』合評会

——怪異と宗教について考える

斎藤 喬

SAITŌ Takashi

本稿は、2022年12月12日に南山宗教文化研究所主催で開催された『怪異と遊ぶ』合評会の報告である。怪異怪談研究会監修、一柳廣孝と大道晴香の編著となる『怪異と遊ぶ』は、一柳が会長を務める怪異怪談研究会の研究成果として、2022年4月27日に青弓社より刊行された。

本合評会では、著者の一人斎藤喬（南山宗教文化研究所）がコーディネーターとなっており、編者で著者の大道晴香（國學院大學）と二人で発題を行い、その上で土居浩（ものづくり大学）がコメントした。今回はオンライン開催となったが、本研究所所員の他に外部から20名以上が参加した。

『怪異と遊ぶ』に基づいて、筆者なりに各発題を要約すると以下のようになる。

発題①：第8章「一九八〇年代の「こっくりさん」—降霊の恐怖を払拭する「キューピッドさん」の戦略」（大道晴香）

現在も降霊遊戯の代表格と見なされている「こっくりさん」は、明治期に欧米から持ち込まれた降霊術に由来する。当時は、巫女の口寄せに類似した宗教儀礼的行為として受け止められていたようであるが、宗教的専門家でない素人が興味本位で執り行う「遊び」であるところに問題が生じる。そこに内包されているのは、制御できない神霊の恐怖である。この要素は消費価値として受容される一方で、「遊び」の範疇から漏れ出る憑依や祟りの実害として報告されることになる。

「キューピッドさん」の名前を持つ1980年代の「こっくりさん」は、少女たちを担い手とする当時の占い・おまじないブームの中で発生した文化現象である。指南書などは制御できない神霊の恐怖を払拭したかのように見せかけているが、護符が付録になったり、「失敗」しないための作法を伝授したりと、読者に恐怖を植え付けることに余念がない。このようにして、「こっくりさん」は宗教儀礼でもなければ「遊び」でもないまま、

制御できない神霊の恐怖を再生産し続ける。

発題②：第2章「語り継がれる狸合戦—阿波における憑依と遊戯」（斎藤喬）

講談師神田伯龍の速記本で知られる『狸合戦』三部作(1910年)は、享保年間に阿波で発生した憑き物騒動に基づいている。そこでは紺屋の奉公人に金長という狸が憑依し、商売繁盛だけでなく失せ物や病氣直しに多大な効験を示したという。しかし金長があまりに霊験あらたかであるがゆえに、四国全土から信仰を集めていた六右衛門という狸と対立し、最終的に金長勢と六右衛門勢が大合戦に及ぶというのが、この伝説の筋書きである。

講談には先行する江戸末期の文献資料が存在しており、奉公人の口走る「金長大明神」が紺屋の屋敷神となって、近隣の流行神となる様子が具体的に描かれている。ただし、伯龍口演には金長以外にも多くの狸話が盛り込まれており、さらに合戦の細部の描写は、先行文献を凌駕する圧倒的な情報量を誇る。金長の物語は、時代を超え今日までさまざまな形で翻案されているが、憑依の現象と信仰の発生という前提を抜きにすると、狸が語ることの意味が見えなくなるだろう。

大道の発題では「降霊遊戯」から生じる恐怖が問題となっており、斎藤の発題では「動物憑依」に基づく祭祀が問題となっており、両者とも「怪異と遊び」のテーマとして、日本の宗教文化の中でも特に憑霊信仰に関する事例を取り上げている。この点について指摘した上で、コメンテーターの土居は、堀江宗正の論考「物語の現実としての霊」（『宗教哲学研究』第36号、2019年）を提示し、発題でこの論考が参照されていないことに批判的に言及した。筆者はこれに対して、「『死者の力』で言うならば堀江氏よりも高橋氏の立場に近い」と返答したのだが、議論が深まることはなかった。

『死者の力』（岩波書店、2021年）は堀江宗正と高橋原の共著であり、先ほどの「物語の現実としての霊」は本書の結論部分にリライトして収録されている。堀江によれば、これは『死者の力』の理論的支柱にすることを念頭に置いて書かれたものである（堀江、前掲書、274頁）。そのため、ここではあえて『死者の力』から、堀江が「物語の現実としての死者・霊」について要約的に記述した部分を引用してみよう。

まとめると、死者の霊の物語の現実とは、心理的な現実としての死者表象、死者イメージが、すでに物語として流通している實在論的な死者表現に託して語られ、それを話すことを通して立ち現われる死者の存在感 presence や實在感 reality（生々しさ）である。そうして、記憶し、語らないと、故人は雲散霧消しかねない。死者を物語ることでその都度立ち現われる死者の實在感が物語の現実の特徴である。同時にそれは死者のイメージを固定化し、陳腐化する面も

ある。とはいえ、物語という形式は、それが真実なのか虚構なのかを宙づりにする。このようでもあり、あのようでもある、という形で、ぼかし、イメージを増幅させ、豊かにする。伝えることを通して、新たな要素が追加されることもある。それは、「霊が実際にある出来事を引き起こしたのか」が気になる人にとっては、信頼に値しない噂話ということにもなる。そのようなものとして散漫に聞かれるならば、フィクションと同等になり、実在感も薄まるであろう。(堀江、前掲書、244-245頁)

先に断っておけば、筆者は「物語的現実としての死者・霊」の概念についてはなんの異論もない。その上で、先ほどの発言は次の高橋の記述を前提にしている。「津波被災地における幽霊あるいは心霊体験、死者のイメージへのアプローチは、親しい身内との絆を象徴する「身近な霊(死者)」を扱う方向と、宗教者に対応を依頼しなければならないような恐ろしい「未知の霊(死者)」を扱う方向に大別される。本書『『死者の力』』に収められた論考は、どちらかといえば堀江が前者、高橋が後者の方向で進めた研究に基づくものである」(高橋、前掲書、ix頁)。

大道と筆者の発題が厳密に「死者」を対象としているかどうかは曖昧であるが、どちらも憑霊信仰のトピックを持つと仮定すると、共有されている根本的な問題関心は「なぜ霊が憑くと恐ろしいのか」である。「未知の霊」にまつわる恐怖が、降霊遊戯や動物憑依の語りでどのように払拭ないし昇華されようとしているかが、今回の発題において問題となっていた。

しかしながら、コーディネーターの力不足もあって議題が不明確になったことは大変遺憾である。恐怖を主題とした宗教学的的研究には様々なアプローチがあるのは当然のことだが、そもそも「恐怖を主題とする」とはどういうことなのか、あるいは「なぜ宗教学が主題とするべきなのか」について、学界において認識を共有できるほどに突き詰められて議論されてきたとは言えない状況である。そのため、今回の合評会を反省の機会として、より開けた研究交流の場を設けていきたい。

さいとう・たかし
(南山宗教文化研究所)